

未完の社会科学

——高島善哉の遺したものは何か——

長 島 誠 一

1. 高島・社会科学の原点

私たち人間は、自然界の一員として生きるとともに(自然的人間)、他者との社会的な交わりの中で生き社会を作りだしているし(社会的人間)、学問や芸術や思想といった精神・文化活動をする(人文的人間)。社会学で研究されているアイデンティティ・クライシス Identity Crisis が問題とするのは、まさにこうした人間存在なり人間活動の諸側面が分裂し、一面的な才能が異常に発達してしまう反面において、他の才能が未発達ないし退化してしまう現代の精神的病気であるようだ。ジェームズ・オコーナー教授は、現代アメリカにおけるアイデンティティ・クライシスとしてのパーソナル危機を社会危機・経済危機と結びつけて考察した。オコーナー教授によればこうした現代社会を覆う「無気力感」(その裏返しである全知全能の神への信仰)は、労働の賃金形態と欲望の商品形態による充足の世界(資本制商品経済)に普遍的な兆候である。ともかく、このような人間存在なり活動の諸側面の本来的なあり方が明らかにされなければならない。

今日人類が世界的な問題として直面しているものとして、たとえば、環境問題、民族・人種

問題、ジェンダー、宗教的対立、貧富の格差、精神的・道徳的な退廃症候群、失業・インフレ・金融不安定性・国家の経済政策の行き詰まりなどとして現象している経済危機、があることには疑問の余地はないであろう。いいかえれば、人類の自然的活動、経済的・社会的活動、そして精神・文化活動の全体において20世紀末の人間のありかたが問われているのである。こうした問題を解明するためには、自然・人文・社会の諸科学が総合的に取り組まなければならない。いいかえれば、自然と社会とを人間を中核として捉え直す必要があることになる。

もともとカール・マルクスやフリードリヒ・エンゲルスの世界観(弁証法的唯物論ないし唯物史観)は、人間の解放とその潜在的能力の全面的な開花を彼らの目標とし、自然・社会・学問芸術にいたる人間存在・活動を総体的に把握する壮大な構想であったといえる。それが公式的な唯物史観化することによって、本来の生命力が麻痺してしまったのではないだろうか。本稿はかかる問題意識から、長年にわたり公式的なマルクス主義の社会科学と対決してきた高島善哉の到達点を点検してみたい。

今から約30年ほど前に到達した高島の社会科学論を取り上げるのは何故か。結論的にいえば、旧ソ連・東欧の「社会主義」が崩壊した今日

においてこそ、高島が意欲的に構想し展開していた問題(マルクス主義の未解決な「アキレス腱」)は解明を迫られているからである。「旧社会主義」が克服できなかった問題(民族問題や国家問題)が明確に指摘されており、高島の到達点を乗り越える方向でこれからの社会主義像が模索構想されなければならないと私は考える。「主体としての階級と母体としての民族」という高島・社会科学の基本テーゼは、いいかえれば、階級の消滅とともに民族は消滅するのか、インターナショナリズムはナショナリズムを否定するものなのか、といった従来のマルクス主義が軽視してきた根本問題を提起するものであり、いまだに明確な回答が与えられていない。そればかりではなく今日において、階級や民族という基本概念は再検討することが迫られているといえる。すなわち、現代資本主義においては、情報化・サービス化によって所有関係、労使関係、決定関係、などが複雑化・多様化し、それにもなつて階級関係も多様化・変質化しているからである。崩壊した旧ソ連・東欧の「社会主義」や現存する「社会主義」において主体としてのプロレタリアート階級が存在しているのかが厳しく問い直されているからでもある。さらに民族問題も同じである。現代の世界は著しくグローバル化しながら、リージョナル化も同時に進行しているのである。また「社会主義」体制の崩壊とともに、局地的な民族・宗教・人種上の紛争が多発しており、民族問題の正しい解決方法が一層求められている。インターナショナリズムとナショナリズムは相互促進的に統一されなければならないとする高島の主張は、今日においてこそ重みを増しているといえる。最近の日本での体制側からの一連のナショナリズム論

に有効に対決するためにも、必要なことを指摘しておこう。

幸いなことに高島善哉著作集全9巻が出版されることになり、直接に高島を知らない若い世代がこの「独創的かつ孤高の社会学者」を体系的に読むことができるようになった。本稿では、「民族と階級」をキー・ワードとする高島・社会科学の総決算とみなされる著作集第5巻を取り上げることにする²⁾。

著作集第5巻を解説した植村邦彦氏は、本書の内容を、民族理論、国家論、風土・人種論、の三つにまとめている。冒頭の今日的諸問題への手がかりを求めるといふ私自身の問題意識から、私の最も興味を引かれるのは、これらの内容を総括する意図で書き加えられた「生産力の理論とナショナリズム」(第10・11章)である。そこにおいて高島は、唯物史観の基本定式について論評しており、ここに高島・社会科学の原点があるように思える。少々長いが引用しておこう。

「生産力と生産関係に関する唯物史観の基本定式というものは、まだ私たちにとって残りなく闡明された定式ではない。多くのマルクス主義者は、この定式を真に自覚された歴史認識として捉えていないように思われる。マルクス自身にしても、その点必ずしも十分ではなかったことはいまいったとおりである。だから私たちとしては、ここでもう一度、いわゆる唯物史観の公式について自分で考え、自分で反省し、誰かの口まねでなく、自分自身に説得できるように原点に立帰って——それは同時に原典に立帰ることを意味する——思索し直すことが必要である。たとえば、公式のいわゆる生産力とは何か、生産力

と生産関係の関係とは何か。こんなことがまず問われなければならないだろう。あたかも国家論の領域において、いわゆる国家とは何か、市民社会とは何か、国家と市民社会の関係はどうかということが、いま私たちの側から改めて問われなければならないのと同様である。私が生産力の論理と呼びたいと思っているものも、結局このような原点(原典)への復帰の意識を表明するものにほかならないのである。』³⁾

唯物史観の再構成——高島自身は「主体的唯物論」と命名した——こそ、高島・社会科学の今日的意義の最大のものではなかろうか⁴⁾。

2. 高島における「生産力の論理」と「風土概念」の必然性

著作集第5巻(『民族と階級』)では、マルクス主義民族理論が全面的に再検討されている(第2～4章)。高島を駆り立てたものは、戦後マルクス主義のナショナリズム軽視に対する不満であり、中ソの対立・東欧に対するソ連の軍事介入を目撃しての「社会主義ナショナリズム」に対する疑念であった。今日的に考えれば、ソ連・東欧の「社会主義」の崩壊とそこでの民族主義の台頭や民族的・宗教的紛争の多発によって民族問題の深刻性を重視せざるを得ない状況が展開している。高島の問題提起は今日こそ真剣に受け止められなければならない状況にあるといえる⁵⁾。高島の批判は、マルクス主義における民族理論を定式化したスターリンの民族論に対して鋭く向けられる(第4章)。スターリン民族論の欠陥は、民族概念の四つのメルクマール(言語、地域、経済生活、文化の共通性の内にあらわれる心理状態)の相互関連をつかむ論理がな

いということであり、また、人種が欠落しているところにある⁶⁾。さらに、民族の死滅性についても根本的な疑問が提起される⁷⁾。前者の欠陥を克服するために高島が提起するものは、「媒介の論理」・「生産力の論理」であり、「風土概念」である。解説者・植村氏はこれらの概念が提起される必然性を次のように要約している。「……スターリンの民族の定義を、自然的なものとの歴史的社会的なものとの『媒介の論理』がまったく欠落している』ものとして批判する。これに対して高島が対置する『媒介の論理』こそ、『歴史における主体と客体の関係をさし示す論理』であり『同時に歴史における自然と社会の関係をさし示す論理』である『生産力の論理』であり、「高島によれば、このエレメント〈民族における一つの自然的なエレメント——引用者〉をつかむためにこそ『風土概念』が必要とされる」⁸⁾。

『民族と階級』においては、民族理論につづいて国家論が展開される。高島は、商品経済から「貨幣の必然性」を導き出す『資本論』の論理を援用して、市民社会から「国家の必然性」を引き出そうとする。植村氏によれば高島の展開は、「この説明の論理は必ずしも整合的でなく、十分に説得的なものとは言えない」⁹⁾ことになるが、本稿の目的にとって必要なのは、何故に国家論が「生産力の論理」や「風土概念」と結びつくのかを明らかにしておくことである。その鍵は高島の市民社会論にあるように思われる。すなわち国家論の原点として、

「国家は、市民社会が一つの共同体として、自己自身を統治するために必然的に自己の対内から産み落とさなければならない共同体の一つのあり方(政治的なあり方)なのである。

市民社会はその固有の論理によって、内在的にその体内から国家を生み出す。これがルソーの国家論の天才的な直感である。』¹⁰⁾として、

「ルソーに帰れ」と呼びかける。またスミス『国富論』第5編で詳細に説明している国家の四つの機能(インフラ・ストラクチャーの整備, 統治機構, 教育活動, 対外活動)を市民社会段階の国家の普遍的な機能として承認している。高島によれば, 資本主義的国家とはこうした市民社会から抽出された国家が資本のもとに階級的に包摂されたものであり, こうした国家機能はたとえ共産主義社会になっても死滅するものではないとする確固たる信念があった。高島の市民社会論は, ヘーゲルのような欲望の体系ではなく, 「生産力の体系」であるから, 「生産力の論理」はそもそも国家論の根底にある論理である。また, 国家が民族と密接に結びついて成立したことからも理解できるように, 国家論は「風土概念」とも不可分離の関係にあったものと思われる。さていよいよ, 「生産力の論理」や「風土概念」によって豊富化された「主体的唯物論」(唯物論の再構成)そのものを検討しよう。

3. 「生産力の論理」

高島は自然と人間と社会に関する唯物史観でいう上部構造と下部構造を, (1)経済的世界, (2)政治と教育の世界, (3)学問・文学・芸術・宗教の世界に整理する。世界をこのように三区分することは, 通常の世界構成体の理解と同じである。高島の独自性はこうした三領域を人間の生産的実践によって結びつけようと試みることにある。第一の世界は「物質的富の生産における

人間の実践」であり, 第三の世界は「文化的及び精神的な富を生産する人間の創作活動」であることは理解しやすいが, 両者の中間的領域として「人間の社会関係・社会的世界」を作りだすのが第二の世界となる¹¹⁾。そして高島は, こうした人間の生産的実践と関連づけて「生産力の論理」を定義する。すなわち, 「生産力の論理とは, 一般に人間の生産的実践における主体的行為の論理」である¹²⁾。

こうした「生産力の論理」の背後には高島独特の生産力把握があることに注意しなければならない。単なる生産力主義と誤解される恐れがあるから, 高島の言うことを正確に見ておこう。生産力について次のように述べている。

「生産力とは生産(生産的実践)において人間が主体的に発動する生命力のことである」¹³⁾。

「生産力とは人間の, 人間のための, 人間による生産力として把握されなければならない(……)生産力はこういう意味であくまでも人間的なものであり, 主体的なものである。これが生産力概念の本質規定なのである。』¹⁴⁾。

こうした生産力把握が, 風土概念や主体・客体の媒介の論理によって肉づけられていく。すなわち,

「生産力は本質的に主体的なものであるとしても, 主体は客体にたいしての主体であるから, 私たちはつぎに, 当然の順序として生産力の客体について考えてみなければならない。』¹⁵⁾。

「生産力の主体である人間は, すでに生産力の客体である自然的風土によって大きな制約を受けているとみななければならない。』¹⁶⁾。

「生産力の主体としての人間は、生産力の客体的要因の制約または規定を克服するための技術を開発することによって、生産力そのものを高め、そのことによって人間自身を進歩発展させる。私はこのいきさつを生産力における主体↔客体の論理、簡単にいって生産力の論理と名づけたと思う。」¹⁷⁾

このように拡充された生産力概念の下で、生産関係は次のようになる。

「では、最後に生産関係というカテゴリーはいかに扱われるべきであろうか。生産力の論理が解明されたいまの段階からみれば、この問題は半ば解決済みだといえそうである。なぜなら、生産関係とは物質的富の生産における生産力の主体と主体との間の関係だからである。この生産関係の問題も、史的唯物論の解釈にとって非常に重要な問題であるにちがいないが、しかし生産力の主体と客体の問題のほうがより根源的であり、より重要であると私はいいたい。」¹⁸⁾

ここにおいて、生産関係としての階級関係よりも上位の概念として、人間の主体的実践(生産力の主体と客体)が位置づけられることになる。人はこれをもって「修正主義」と呼ぶかもしれないが、階級関係をダイナミックにとらえ、あたらしい社会主義像を構想できるか否かによって最終的に判断されるべきだと私には思える。今日の状況を踏まえての筆者の問題意識は次のようになる。

旧ソ連・東欧や中国等の「旧および現存の社会主義」において、生産手段は国有化されたが(「全人民的所有」)、プロレタリアートは解放されず、その労働力を「強制的に販売」していたとみなせる。さらにプロレタリアートが階級的主体

体となったのではなく、ノーマンクラツラとしての特権階級(党と国家の高級官僚)が支配する一種の階級社会であった¹⁹⁾。たしかに所有関係は主体としての階級の物質的基盤であるが、経済・政治・文化の全分野での生産的实践、そこでの人間の主体性と解放を実現する過程こそがもっと重要であった。仮に共産主義社会に到達して階級が消滅したとしても、人間の複雑な存在様式(たとえば性善説と性悪説)は依然として残るのである。人間の生産的实践から出発して、社会主義的人間関係が新たに構想されなければならないのではなからうか。

また現代資本主義においても、資本=賃労働といった単純化された抽象的階級概念は豊富化する必要がある。第1節においても指摘したが、サービス化や情報化の著しい進展によって、労働の内容が肉体的分野から精神的・文化的活動にシフトした。こうした傾向を労働からの「解放」とみるか、労働の多様化・複雑化とみるかはマルクス経済学にも鋭く突きつけられている課題といえる。高島の提起した拡充された「生産的实践」概念によって労働の現代的状態を分析する必要があるだろう。さらに現代の独占的大企業(巨大株式会社)内における階級関係は、職制による「管理・非管理」のピラミッド体制の下で非常に複雑化している。資本にしても所有する主体と経営する主体が分離し、支配権の所在が不明確になっている。簡単には「生産力と生産関係」に分離できない領域が拡大してきたのであって、むしろ生産力と生産関係が重なり合ってきたといえるであろう。たとえば、広範囲のサラリーマン層は、資本としての機能を代行している側面と賃労働として搾取されている側面をともに持っている(二重人格)。また

「管理・非管理」の企業内の分業体制は、生産力の側面と生産関係の側面とを同時に持っているといえる。これらの例は、生産力や生産関係といった概念を現段階で豊富化していかなければならないことを意味する。

生産的実践を重視する高島は、ただ単に主体としての人間を抽象的・一般的にのみ捉えるべきでなく、その個性・特殊性においても捉えなければならないとする²⁰⁾。マルクス『資本論』においては、資本家は「資本の人格化」として労働者は「労働力商品の人格化」として扱われる（「人格の階級化」）。しかしこの関係を逆転させた「階級の人格化」として捉え直すと、生きた人格としての資本家や労働者個人が再登場してくる。両概念の関係は次のように要約される。

『「人格の資本化」』は資本一般の立場を前提している。ここでは人格は疎外されている。これにたいして『資本の人格化』は人間の入る余地を残している。疎外からの脱出の余地を残しているといえないだろうか。後者すなわち『資本の人格化』は前者すなわち『人格の資本化』の結果ではあろう。しかし『人格の資本化』を完遂したのも実は『資本の人格化』としての資本家の働きの結果であったことを知るべきであろう。要するに主体は人間であり、疎外された人間を回復するものもまた人間自身であるとするれば、人間とは何か、とりわけ主体的人間とは何かという問題について、あらかじめはっきりした認識を持つということが疎外論の研究においてもいかに重要であるかが理解されるであろう。²¹⁾

「人格の階級化」の世界は、経済人の世界であり、システムとしていえば経済システムの世界であり、疎外され物象化された世界である。し

かし「階級の人格化」された世界においては、経済人は生身の人間であり疎外・物象化の支配に直接的には従属していない。ここから変革主体の登場を見つけだしていく可能性が開かれるかもしれない²²⁾。

さて、このような生産的実践概念や生産力の論理によって、先の三つの領域は次のように再構成される。

「そこで私の構想は、社会構成——私の言葉では社会体制——をいわば三階建ての建物として構造的に捉え、その建物の一階(経済)、二階(政治と教育)、三階(学問芸術など)の間にそれぞれ交互連関的な関係を認めたと上で、この建物の内部構造を位層連関という言葉で表現してはどうかということである。そしてこの位層連関を一義的に規定する原理が、とりも直さず、私のいわゆる体制原理である。体制原理とは？ それは資本主義体制においては資本の支配、封建体制においては土地所有の支配、共産主義体制においては労働の支配という言葉で表現されうるだろう。」²³⁾

こうした高島の構想の背後にある問題意識は、次のようになる。

「私が生産力の論理と名づけるものは、史的唯物論の解釈において、いかにしてあの素朴な機械的唯物論を克服することができるか、いかにして主体的な要因を史的唯物論の論理の中へとり入れることができるか、という問題を念頭においているものである。」²⁴⁾ どうして高島が、「主体的唯物論」と自称しなかったのかは私には不明である。

4. 風土概念

高島の民族と階級に関する基本的テーゼは、「民族は母体であり階級は主体」である。この両概念を結ぶ「共通の磁場」なり「相互媒介的に結びつける」ものとして風土概念が構想される。まず風土とは、自然地理学にとっては自然環境であり、人文地理学にとっては人間との関わりにおける自然環境(景観)であるが、社会科学は「歴史的社会的風土」を重視しなければならない。すなわち、

「人間は自然との関わり合いにおいて生きており、したがって人間は歴史的社会的生活のどの場面においても、自然との係わり合いを完全に断ち切ることはできないということである。人々がそのようなものとして自己を感じたとき、そこに風土という概念が生まれなければならないのである。」²⁵⁾

そして風土と民族との関係は、

「風土は民族の体質または気質であると私はいった。また、風土は民族の個性がその個性を発現するための磁場でもあるといった」²⁶⁾

関係である。こうした観点からして、ウェーバーのエトノスやスターリンのナロードノスチが注目される。そして、

「民族形成の歴史を過去へ遡れば遡るほど、風土と民族の間には事実上差別がなく、両者は事実上一つのものとして合体している」²⁷⁾

ことになる。

次に高島が風土と民族の関係づけとして援用するのは、エンゲルスの『猿から人間への移行における労働の役割』である。前節で検討した

「人間の主体的実践」概念が、エンゲルスの見解と基本的に一致していることが検証され、次のようにエンゲルスが高く評価される。すなわち、

「たとえば第一に、エンゲルスのこの文章は私のいわゆる主体的唯物論——普通に弁証法的唯物論といわれるもの——と呼んだものを的確に端的に示しているし、第二に、マルクス主義の人間観について深い示唆を私たちに遺している。……第三には、……、エンゲルスはここで風土と民族 Volk のふれ合いについてはしなくも語っていると私はいいたい。」²⁸⁾

高島が「猿から人間への移行における風土の意義」として引用されるエンゲルスの文章を再現すると以下ようになる。

「要するに、動物はただ外部の自然を利用するだけであり、ただ自分がそこにいることによって自然の中にいろいろな変化をひき起こすだけである。人間は自分のいろいろな変化によって自然を自分の目的に役立つものにし、自然を支配する。」²⁹⁾

「とはいえ、われわれは、自然にたいするわれわれ人間の勝利をあまり喜んでばかりもいられない。このような勝利のつど自然はわれわれに報復する。」³⁰⁾

「われわれはけっして、他民族を支配する征服者のように、自然の外にたつ者のように、自然を支配するのではない」³¹⁾。

「そうではなく、われわれは肉と血と脳とをもって自然に属し、自然のまん中に立っているのだ。そして、自然にたいするわれわれの全支配は、すべて他の生物にまさって自然の諸法則を認識し、正しく応用することがで

きる点にある。』³²⁾。

こうしたエンゲルスの発言の中に、自然の中の人間と人間の中の自然との正しい認識があり、ここから社会科学的な風土の理論がはじまると、高島は結んでいる³³⁾。今日の状況に照らしていえば、次のような問題が解明を迫られている。

環境破壊、人種問題、ジェンダー、宗教紛争などの現代の諸問題は、いわゆる経済学プロパーでは解明できない。それはまさに自然と社会と文化を作りだしている人類総体の問題として、自然・社会・人文の諸科学全体が学際的に取り組まなければならない課題である。ここで筆者が指摘しておきたい点は、こうした諸問題を総体的に解明する視点を唯物史観は提供していることである³⁴⁾。高島流に言えば、これらはすべて「風土概念」と密接な関係があるのである。今日の地球規模での環境破壊は生態系のバランスを破壊するほどに自然を変えすぎた結果であり、まさに「自然からの報復」(エンゲルス)に直面しているのにほかならない。高島のいう「自然の中の人間、人間の中の自然」という厳粛な自然の摂理を傲慢に無視してきた資本の論理の一掃結である。私たちは、生態系のバランスを保ち「自然と共生」できるか否かという視点に立って、生産様式や社会体制のあり方を問い直さなければならない。

人種差別や性差別や宗教紛争は今後さらに深刻になってくるだろう。というよりは差別されてきた側の自己解放(それは一時的な行き過ぎを伴うだろうが)運動が高揚してくることは確実に予想される。しかもこうした問題は、現代的には体制原理(資本の論理)によって規定されながら発現している。こうした側面は正に社会

科学としての経済学が解明しなければならないが、人種や性の区別は永久に変わらないだろう。人間の存在原理なり人間の主体的実践の次元にまで降りてみて、人種・性の本来的あり方から出発する必要があるのではなかろうか。

注

- 1) James O'Connor, *The Meaning of Crisis - A Theoretical Introduction*, Basil Blackwell, 1987, pp.166-75.
- 2) 著作集第5巻の解説(植村邦彦氏)でも、この巻が「民族と階級」に関する高島の考察の総決算にあたりと位置づけられている。高島説をめぐる論争についてはこの解説を参照されたい。
- 3) 高島善哉『民族と階級』(著作集第5巻)こぶし書房, 1997年, 339-40頁。
- 4) こうした高島・社会科学の全体的評価については、山田秀雄氏の次のような発言が的確であると考えられる。「……, 高島の生涯の課題は、大胆に要約すれば、公式論者が繰り返すだけの唯物(タダモノ)史観の批判的克服によって、人類社会つまり高島のいう市民制社会、の真に根源的な歴史観を構想すること、にあった」(パンフレット「高島善哉著作集の刊行によせて」こぶし書房, 1997年)。
- 5) マルクス主義における民族問題の軽視については、今日の状況を踏まえながら、富塚文太郎氏も論じている(同「マルクス主義世界観の欠陥——それでもマルクスは死んでいない——」御園生等編「いま、マルクスをどう考えるか」河出書房新社, 1991年)。この論文はマルクス主義における階級国家論や階級闘争史観の一面性を克服しようとする意図で書かれている。国家や民族は階級概念よりも上位概念とする点において、高島の発想と似ているといえる。
- 6) 著作集第5巻, 146-7頁。なお、高島をスターリン民族理論の全面的検討に向かわせたのは、柴田高好氏の書評である(「書評『現代日本の考察』」『日本読書新聞』第1399号, 1967年3月20

日)

- 7) 同上書, 149-54頁。
 8) 同上書, 399頁。
 9) 同上書, 404頁。
 10) 同上書, 185頁。
 11) 同上書, 329-33頁。
 12) 同上書, 328頁。
 13) 同上書, 342頁。
 14) 同上書, 343頁。
 15) 同上書, 344頁。
 16)・17) 同上書, 346頁。
 18) 同上書, 350頁。
 19) 旧ソ連の「社会主義」についてはいろいろな見解が提起されているが、ポール・スウィージーは、資本主義でも社会主義でもない革命後に形成された一種の階級社会と規定した。ポール・スウィージー著、伊藤誠訳『革命後の社会』TBSブリタニカ, 1980年。
 20) 著作集第5巻, 380頁。
 21) 同上書, 385頁。
 22) 高須賀義博は「二重人格論」から経済人と社会人を論じているが、同一の人格が「人格の階級化」の世界では経済人として、「階級の人格化」の世界では社会人として行動するものと構想していたといえる(同「遺文・『経済人』対『社会人』」追悼文集刊行委員会編『思い出の高須賀義博』ラビック, 1993年。なお同追悼論文集には高須賀の著作目録が収められている)。本間要一郎氏は、「人格の階級化」の世界を物象化された経済システムとし、「階級の人格化」の世界を基本的には物象化されていない社会システムとして社会構成体を再構成しようと試みた(同「経済システムと社会システム」『熊本学園大学経済論集』第1巻第3・4号, 1995年3月)。ともに変革の主体を社会人や社会システム側に求めようとするものであり、高島の問題提起の延長線上にあるように思える。
- 23) 同上書, 338頁。
 24) 同上書, 349頁。
 25) 同上書, 357頁。
 26) 同上書, 358頁。
 27) 同上書, 359頁。
 28) 同上書, 363頁。
 29)・30)・31)・32) フリードリッヒ・エンゲルス『猿から人間への移行における労働の役割』(岡崎次郎訳, 世界の大思想 II-5, 河出書房, 382-3頁)。
 33) 著作集第5巻, 366頁。
 34) 広松渉は、マルクスやエンゲルスにもともと生態学的発想があったことを文献的に明らかにしながら、それを唯物史観に取り入れた人類史像を構想する先駆的な試みをした(同『生態史観と唯物史観』講談社, 1991年)。